©へるす出版

特集

末梢静脈血管留置カテーテルの管理

特集にあたって

よりよい末梢静脈血管留置カテーテルの管理とは何か。改めて考えてみませんか

末梢静脈血管留置カテーテルの管理は，小児医療の現場では日常的に行われています。しかし，その内容は，痛みを伴う処置である留置針の穿刺，子どもの動きを抑制する固定，危険予知が困難な子どもを対象としたルート管理や環境整備，血管外漏出などの異常の早期発見，小児を対象とした厳密な薬剤管理，非日常的な状況に置かれた子どもと家族へのかかわりといった多様な要素を含みます。そのため，日常的とされる末梢静脈血管留置カテーテルの管理には，観察力やアセスメント能力，確実な看護技術をベースとしながらも，子どもに寄り添い，その生活や権利をどう尊重できるかという看護の視点が重要であると考えています。本誌におきましても，タイトルに違いはあるものの末梢静脈留置カテーテルの管理についての特集が何度か組まれてきました。しかし，小児医療においては，いまだ末梢静脈血管留置カテーテルの管理について標準化されたものがなく，施設により管理方法もさまざまです。

このような背景から，第27回日本小児看護学会学術集会では，テーマセッション「小児看護専門看護師と考えるエビデンスに基づいた末梢静脈血管留置カテーテルの固定管理」を開催いたしました。技術や方法論だけでなく子どもの体験や生活に着目すること，日常のなかから改めてevidence-based practiceについて考える機会とすることを目的としました。「文献検討」でテーマにおける研究的背景を共有したあと，「新生児期（NICUでの管理）」「小児期」「重症心身障がい児」の看護について話題提供し，その内容に応じてグループワークを行いました。当日は200名を超える参加があり，本テーマにおける関心の高さを実感しました。そして，当セッションを行ったことで，いくつかの看護上の課題が抽出されました。末梢静脈血管留置カテーテルの管理は，一般的な処置にもかかわらずその研究は少なく，各施設による取り組みの発表はあるものの，evidenceに至るまでの検証はありません。そのため，伝統的に行われている管理について，他職種や管理者を説得し変革に向かうだけの根拠に乏しいという声がありました。また，手順により看護の質の担保を図ることは重要ですが，個別性にどう対応するかといった判断や技術についても，その根拠が経験的であり集約されたものがなく，現場の看護師の困難感につながっていました。医療者主体となりやすい処置や管理のなかで，子どもの権利や生活を守るための工夫についても多職種協働で取り組むべき課題としてあがりました。これらの課題を受け，本特集では「固定管理」から固定という言葉を外しています。

本特集をとおして，末梢静脈血管留置カテーテルの管理についての課題を皆さまと共有し，子どもの目線を尊重する質の高い看護実践や新たな研究へとつながることを願っています。

倉敷中央病院／小児看護専門看護師
森貞敦子 Morisada Atsuko